［シンポジウム］

バルト諸語とその隣人たち
――民族と言語をめぐる諸相――

櫻井　映子

去る 2017 年 6 月 17 日、上智大学四谷キャンパス図書館において、シンポジウム「バルト諸語とその隣人たち――民族と言語をめぐる諸相――」が開催された。本シンポジウムは、日本スラヴ学研究会と上智大学ヨーロッパ研究所が主催し、科学研究費基盤 (A)25243002（研究代表者：沼野充義）「越境と変容――グローバル化時代におけるスラヴ・ユーラシア研究の超域的枠組みを求めて」の協賛、駐日リトアニア共和国大使館及び白水社の後援のもとで実現したものである。総合司会は木村護郎クリストフ氏、各報告の司会・コメンテーターは野町素己氏が務められた。

日本スラヴ学研究会のシンポジウムのテーマとして、バルトの国々とその言語を取り上げることは初めてであり、ある種の冒険的試みであった。どれほどの会員が関心をもってくださるかは未知数であったが、幸い企画を担当した筆者を含む関係者の予想をはるかに凌ぎ、100 人を超す参加者を迎えることができた。会員のみならず、会場校の教員やスタッフの方々、そして、様々な大学の学生や一般の方々も多数ご参加くださり、会場は熱気に包まれた。シンポジウムの終わりに、ご多忙のところ足を運んでくださった、エギディユス・メイルーナス駐日リトアニア大使から、心のこもったご挨拶をいただいたのも嬉しいことであった。

シンポジウムの概要と展望

今から 100 年前の革命を機に、強大なロシア帝国の支配下にあった、より「小さな」国や民族が、独立という長年の悲願を達成した。中でも、バルト海東岸を縁取るかたちで並んだ、エストニア、ラトヴィア、リトアニアの三国は、後のソ連時代を経て、1990–1991 年に再び独立を回復するに至るまでの現代史を共有した。そのような、自他ともに認める運命共同体としてのイメージが、「バルト諸国」や「バルト三国」という呼称を一般に定着させたと言える。

それに対して、「バルト諸語」という言語学用語については、注意が必要である。実は、上で述べた「バルト諸国」の公用語のうち、リトアニア語とラトヴィア語は言語学的に「バルト諸語」に分類されるが、エストニア語はこれに含まれない。より詳しく言えば、リトアニア語とラトヴィア語は、インド・ヨーロッパ（印欧）語族のバルト語派に属する。この語派の言語中、現在まで生き残っているのはこれら二言語のみであ

り、最も近い関係にあるのはスラヴ語派である。一方、エストニア語は、フィンランド語と同じくウラル語族のフィン・ウゴル語派に属しており、まったく系統の異なる言語なのだ。

さて、本シンポジウムは、上のような事情を背景として、現存する「バルト諸語」、すなわち、リトアニア語とラトヴィア語を軸に、これらの言語の隣人たちとの交流、相互影響、そこから生じた変容について検討することを試みた。長期間に渡り支配体制と国境が複雑に変遷してきたこの地域における言語状況は、幾重にも層をなした多様な言語接触によって説明されるべきものである。すなわち、過去から現在に至るまでの、「バルト諸語」とその内外に存在する「隣人」たる他（多）言語との有機的な相互関係を踏まえて、改めて当該地域の実態を捉え直してみようというのが、本シンポジウム開催の動機である。

こうした取り組みは、実はこれまでさほど一般的ではなかった。と言うのも、バルト諸語は、インド・ヨーロッパ語族の諸現代語中でも最も古風であるとみなされており、その奇跡的に保たれた古態性がとりわけ言語学者らの注目を集めると同時に、民族的アイデンティティの支えとなってきたのである。よって、比較的「小さな」言語としては、歴史的側面からの研究が例外的と言えるほど充実しているのに対し、現在なおこれらの言語の隣にある他言語の影響についての話は、とりわけバルト諸国内においてはご法度であった。

そのような背景のもと、本シンポジウムは、最終的には次のような研究に発展させることを目標としている。まずは、これまであまり取り上げられてこなかった、バルト諸国における多民族・多言語間の接触と相互影響がもたらした現状について、ミクロな視点から詳細に検証すること。それと同時に、バルト諸国とその周辺地域から、より広く環バルト海地域に視野を拡大しつつ、全体をマクロな視点から観察し、諸言語の多様な個別性の中にある種の普遍性を発見すること。また、そうした取り組みを通じて、これからのバルト・スラヴ学研究の可能性を探り、さらには、それがどのように言語（および文学）の一般研究に貢献できるかを考えてゆくことである。

報告

報告者 5 名のうち、筆者はリトアニア語、堀口大樹氏はラトヴィア語の文法研究を専門とする言語学徒だが、いずれも並行してロシア語との対照研究に従事しており、大きな括りとしてのバルト・スラヴ学の中に、バルト学ひいてはバルト諸語の研究をどう位置づけるかについて長年模索してきたという点で共通している。それに対して、清沢紫織氏はベラルーシ語、栗林裕氏はチュルク諸語、三谷惠子氏はスラヴ諸語というそれぞれの専門領域から、バルトとスラヴの地域的隣接性がどのような形で互いに

影響を及ぼしてきたかという点に着目し、多角的な取り組みを展開している。それぞれ対象やアプローチ法は異なるが、いずれも日本における従来のバルト・スラヴ研究とは一線を画したユニークな試みであり、今後の当該分野の研究の大きな進展を予感させるものであった。

以下に各報告の概略をまとめる。なお、堀口氏、栗林氏、三谷氏の詳しい報告内容と研究成果は、本節の後に論文形式で掲載されているので合わせて参照されたい。

リトアニアの多言語性――ラトヴィアとの比較――

櫻井　映子・堀口　大樹

バルト海東岸に位置するいわゆるバルト諸国は、歴史的に大きな体制転換と国境の変遷を幾度も経験し、多様な民族と言語が混在し交差してきたという共通点をもつ。報告では、隣国ラトヴィアとの類似と差異に基づき、リトアニアの言語状況を特徴づけるとともに、この地域における多言語性とその変容がもたらした影響について考察した。さらに今後の展望として、スラヴ諸語を始めとする隣接する諸言語との関係を中心とした「環バルト海地域」の多言語的文脈の中に、バルト語学及びバルト文学研究を位置づけることを提案した。

バルト諸国のベラルーシ人とその言語をめぐって

清沢　紫織

ベラルーシはスラヴ諸国の中でも、リトアニア及びラトヴィアの双方と国境を接する数少ない国であり、同国の言語状況と政治支配史、及びベラルーシ人の民族文化は、古来よりバルト諸国・バルト諸民族との連続性のもとに発展してきた。こうした背景のもと、リトアニアとラトヴィアの両国には現在でも多くのベラルーシ人が暮らしている。報告では、両国に住むベラルーシ人の言語と文化保持をめぐる状況を両国で 20 世紀初頭から展開されてきたベラルーシ人学校の歴史と現状に着目し考察を試みた。

バルト・スラヴ語世界におけるチュルク系少数言語
——カライム語とガガウズ語——

栗林　裕

カライム語は、ユダヤ教の一派を信仰するリトアニアの少数民族の母語であり、チュルク語キプチャク語群に属する危機的少数言語である。チュルク語はOV語順が基本であるが、カライム語はVO語順を持つ。一方、ブルガリアのガガウズ語はチュルク語オグズ語群に属するが、カライム語と類似した言語特徴を共有する。報告ではカライム語とガガウズ語を中心に、バルト・スラヴ語世界におけるチュルク語との言語接触の一端を紹介した。

環バルト海地域における言語接触と言語変化

三谷　惠子

「環バルト海地域」とよばれるヨーロッパ北東部の一角は、スラヴ系、バルト系、ゲルマン系、バルト・フィン系の諸言語、さらにはチュルク系言語などが相互にかかわりながら多層的な言語文化を形成してきた地域である。報告では、この環バルト海地域で用いられてきたスラヴ語、バルト語、ゲルマン語の関係を言語接触の例によって紹介しながら、スラヴ語・バルト語研究、言語類型論、歴史言語学におけるこの地域の意義を考えた。